

質の高い学びを創造する授業づくりー「アクティブ・ラーニング」をめぐるー

佐藤 学 (学習院大学)

1) 「アクティブ・ラーニング」の波紋

昨年11月20日の文部科学大臣の中央教育審議会への諮問における推奨以来、「アクティブ・ラーニング」をめぐる波紋が広がっている。諮問文は、わずか2ページほどの短い諮問文に「アクティブ・ラーニング」という言葉は4回も登場している。

「アクティブ・ラーニング」について諮問文は「主体的協同的な学び」と表現しているが、この用語自体に特別の意味があるわけではない。海外の教育学事典のどれをひいても、この用語を見出すことはできないだろう。「アクティブ・ラーニング」という用語は、日本の大学の授業改革において活用されてきた用語である。講義形式による学生の学びの受動性を克服し、能動的、活動的、協同的に学生が学ぶ授業への転換をはかる標語として「アクティブ・ラーニング」という用語は汎用されてきた。その用語が、初等中等教育の授業改革の標語として導入されたのである。

これまで学習指導要領は「何を学ぶか」という教育内容の標準を示してきた。しかし、次の学習指導要領は、「何を学ぶか」だけではなく、むしろ「どう学ぶか」の標準も示すことになる。これは一大転換である。

文部科学省が「アクティブ・ラーニング」の導入を決断した背景には、どの国際調査を見ても日本の授業が19世紀型の枠にとどまり、21世紀型の授業へと転換していない実態がある。事実、私の知る限り、日本の授業スタイル（生徒の学びのスタイル）は、どの国よりも古いスタイルで、どの国よりも受動的である。この実態を変えねばという文部科学省の焦りが、4度も登場する「アクティブ・ラーニング」という言葉に込められている。さらに言えば、2007年以降実施されてきた全国学力テストの結果から、活動的で協同的な学びが学力向上に不可欠であるという実証的な裏付けも、文部科学省の決断の背後にある。確かに、1989年のベルリンの壁の崩壊以後、グローバリゼーションが急激に進行し、知識基盤社会に対応した学校教育が求められて、世界各国で一挙に授業と学びの改革が進行してきた経緯を考えると、今回の「アクティブ・ラーニング」の推奨は、20年近くも遅れた施策である。今からでも遅くはない。これを契機に日本の授業と学びは、一挙に革新されるべきである。

しかし、ひるがえって、文部科学省による「アクティブ・ラーニング」の推奨は、学校現場において、授業の改革と学びの革新を有効に達成するだろうか。

2) 質の高い学びの追求へ

率直に言って、「アクティブ・ラーニング」の普及と流行によって、学校現場の授業と学びが改善されるかと問われれば、「ノー」と言わざるをえない。文部科学省の政策がまちがっていると言うのではない。授業の改革と学びの革新は、それほど単純には達成できないこ

とを十分に認識すべきであると主張しているのである。もし、この認識を欠落するならば、「アクティブ・ラーニング」の推奨は、ただ生徒が活発に動きまわり、内容の乏しい話し合いに終始する劣悪な授業と学びが広がるだけだろう。

この危惧は杞憂ではない。昨年末以来、教育雑誌や研究会で「アクティブ・ラーニング」という言葉に触れる機会に遭遇するが、いずれの機会もため息が出てしまう。「知識の活用」「問題解決学習」「プロジェクト学習」「フィールドワーク」「調べ学習」「ディベート」「グループ学習」「プレゼンテーション」「振り返りシート」「発信技法」「コミュニケーション・スキル」「ロールプレイ」「書く活動」・・・それらを実施すれば、「アクティブ・ラーニング」が実現し、教育効果があがるという論調が席卷している。ひどい話である。これらの雑誌の寄稿者たちや研究会の発言者たちは、こういう論評や発言がまかりとおる状況があるから、国際的に見て日本の教師の授業はもっとも古くさく、生徒の学びはもっとも受動的なままであったことをまったく認識していない。この状況における「アクティブ・ラーニング」の普及は、学校における教育の質を低迷させてしまうだろう。日本の授業が今なお一斉授業の呪縛にとらわれていることは事実だが、もう一方で日本の教師の一斉授業の質は高かったことも事実なのである。

現状において実施されている「アクティブ・ラーニング」を見てほしい。「問題解決学習」「プロジェクト学習」と銘打っていても、そのほとんどは、教科書を読めばわかることを生徒たちに活動させているに過ぎない。グループ学習は、もっと問題が多い。意見の交流と話し合いに終始していて、どこにも学びが成立していないグループ学習がほとんどである。(少し説明を加えておくと、話し合いには学びはない。話し合いや意見の交流は、すでにわかっていること(既知の事柄)を交流しているだけだからである。学びは既知の事柄の発表や交流ではない。未知の事柄の探究である。したがって、学び合いは話し合いにはならない。)

このような混乱が生じてしまうのは、「アクティブ・ラーニング」が、形式やスキルやスタイルによって実現すると考えられているからである。この前提が検討されない限り、「アクティブ・ラーニング」が学びを創造することは不可能である。しかし、これまで触れた教育ジャーナリズムや教師の研究会で「アクティブ・ラーニング」が論じられ語られるときに、この前提の検討はまったく不問に付されていた。文部科学省の政策担当者が認識していない、恐るべき現実が、教育ジャーナリズムと学校現場には蔓延している。

3) 質の高い学びの創造

うわすべりの改革を排して、しっかりと根をはった授業の改革と学びの革新を「アクティブ・ラーニング」として推進するためには、どう対応したらよいのだろうか。まず重要なことは、文部科学省の政策は政策として受け止めたうえで、「アクティブ・ラーニング」という用語は使わず、その趣旨を教室の実践の事実として創造することである。「アクティブ・ラーニング」という用語で論評し、授業を語る人々は相手にしないぐらいの覚悟が必要である。「アクティブ・ラーニング」の実践は、それらの人々が想定するほど、簡単ではないだ

から、その実践の事実を語らないまま、安易に用語を振り回すべきではない。)

「アクティブ・ラーニング」という用語を使わず、その趣旨を実践の事実で創造することなしには、質の高い学びを教室に実現することは不可能だろう。

「質の高い学び」とは、どのような学びなのだろうか。私の参加している学びの共同体の学校改革における授業研究では、20年間をかけて「質の高い学び」を追求し続け、その内実と条件を実践的に研究してきた。その結果、以下の合意を形成している。

- ① 質の高い学びは、活動的で協同的で反省的な学びである。
- ② 質の高い学びは、聴き合う関係を基盤とする協同的学びによって実現する。(話し合いでも教え合いでもない。)
- ③ 質の高い学びは、教科書レベル以上の「ジャンプの課題」を協同的な学びに導入することによって実現する。(一人では誰も達成できず協同でしか達成しえない高いレベルの課題の設定が必要である。)
- ④ 質の高い学びは、真正の学び (authentic learning) によって成立する。(文学には文学らしい学びがあり、数学には数学らしい学びがある。)
- ⑤ 質の高い学びは、一人残らず学びの主人公になる民主的共同体において成立する。
- ⑥ 質の高い学びは、ケアの共同体に支えられた学びの共同体において成立する。

これら6つの内実と条件がそろったとき、「質の高い学び」が実現する。もちろん、これら6つの内実と条件をつくりだすことは決して容易ではないが、これらの内実と条件が創造しない限り、「質の高い学び」は生み出せないのである。「アクティブ・ラーニング」を授業の方法や技能やスタイルとして語り議論している人々が、いかに肝心なことは何も認識せず、安直に流行に乗じているかを理解していただけるだろう。

4) 学びのデザインとリフレクションとしての授業研究

文部科学省による「アクティブ・ラーニング」の推奨を受けて、授業の改革と学びの革新を有効に達成するためには、校内における授業研究も転換しなければならない。これまでの授業研究は、一言で言えば、「教え方」の研究であって、「学び」の研究ではなかった。事実、私が一般の学校の授業協議会を記録した教師たちの発言データによれば、8割以上が教師の教え方と教材研究に関する発言であり、生徒の学びに関して言及した発言は2割にも達していなかった。この割合を逆転させる必要がある。一人ひとりの生徒の学びの事実が固有名で語られ、その学びの意味とその学びを成立させた関係、および教室の出来事の実事の中に潜在している一人ひとりの生徒の学びの可能性について語り合って研究することが求められている。

「アクティブ・ラーニング」の趣旨を教室で実現するためには、授業研究を「学びのデザインとリフレクション」を中心とする研究へと転換する必要がある。これも大事業である。一朝一夕で転換しうるものではない。私の経験から言っても、教師たちの授業協議会が「学びのデザインとリフレクション」において有効に機能するためには、少なくとも100回の

授業協議会が必要である。授業の改革と同様、授業研究の改革も、決して容易なことではないのである。

最後に「アクティブ・ラーニング」を可能にする学習科学と教育学の学びの重要性について触れておきたい。旧来の一斉授業とは異なり、「アクティブ・ラーニング」による授業は、学習科学の理論的知識と学びに関する哲学を必要としている。幸いなことに、この30年間、世界の教育学者と心理学者は、認知科学と学習科学の研究を前進させ、豊富な学術的な知見を蓄積してきた。それらは直ちには授業実践に活かさないものも多いが、それらを学ぶことで「アクティブ・ラーニング」の基礎を認識することは重要である。この機会に、それらの知見を学ぶことも推奨したい。